

どうぶつこうえんニュース



ブラッサグェノン 検疫中 (霊長目・オナガザル科)

平成15年2月3日に新しいサルがやって来ました。その名は、ブラッサグェノン、オスが1頭、メスが1頭です。ブラッサグェノンは、平成9年までにも当園で飼育されていたので、6年ぶりの再登場です。

オスは出生地不詳(日本)の推定13歳、メスは広島市安佐動物公園生まれの9歳です。オスの体重は約10kg、メスは約5kgでオスはメスの2倍あります。

野生では、東アフリカのエチオピアから、西アフリカのカメルーンまでの湿地林・川辺林など水の近くに3～10頭以上の群れで生活し、1日に400～500mしか移動しません。

食べ物は、70%以上を果実が占めます。来園した2頭も果物は大好物です。

ブラッサグェノンの「ブラッサ」は19世紀後半のイタリアのアフリカ探検家サボルニアン・ド・ブラッサからきています。「グェノン」はフランス語の「しかめっ面をする」とか「気取った顔をする」という意味のことばに由来しています。灰色の顔にオレンジ色のはちまきをし、鼻から顎にかけて白い

顎ひげを生やし、偉ぶった顔をしています。

動物病院に来てすぐ、メスは園外工事の初めて見るショベルカーやダンプカーに驚いていましたが、その後、落ち着きました。検疫が終わってから、このニュースの発行時には、サル比較舎で、その姿がご覧になれます。



中村 誠 (Makoto Nakamura)

目次

CONTENTS

- 表紙【オランウータン】 ①
- トピックス【ブラッサグェノン 検疫中】 ②
- 特集【新オランウータン舎紹介】 ③
 - 特別展示室より
 - 市の鳥制定10周年記念
- 【これがコアジサシだ!】 ④～⑤
- 【プロジェクトZoo(ズー)】 ⑥
- 動物公園日誌から【03.2/1～03.4/30】 ⑦
- 裏表紙【エミュウのヒナ】 ⑧
- Information ⑧

表紙の動物説明 オランウータン

オランウータンは、東南アジアのボルネオ島とスマトラ島にのみ、それぞれボルネオオランウータンとスマトラオランウータンが生息しています。完全な樹上性で、果実を主に木の葉や小動物も食べる雑食性で、特にドリアンなどの果物は大好物で、実の熟す木の場所や時期を正確に記憶するなど、高い知能を持っています。

千葉市動物公園では、オランウータンの生態をより知ってもらおうと、檻式のドーム状の展示場を新設しましたが、さっそく鉄格子を伝わって、高さ10mある天井まで上り、それを見た向かい側にいるゴリラやチンパンジーが大騒ぎしていました。

秦 舜二 (Syunji Hata)

動物飼育数

平成15年4月末現在の飼育数

Classified number of animals
as of 30.Apr.2003

哺乳類	66種	421点	両生類	1種	2点
鳥類	80種	294点	魚類	0種	0点
爬虫類	7種	24点	総計	154種	741点



新 オランウータン舎 紹介



イメージパース

1 はじめに

当園では、昨年7月より建設を進めていたオランウータン舎が今年3月末日に完成し、4月26日から皆様に公開しているところですが、その施設の概要につきましてご紹介します。

2 経緯

モンキーゾーンの中心施設である類人猿舎の寝室や放飼場が不足したことや類人猿の飼育展示形態の充実を図るため、隣接地に新設したものです。

3 施設の特徴

野生で生活しているオランウータンが完全な樹上生活であることから、屋外放飼場では生息域の熱帯多雨林帯の樹木を模した擬木(ぎぼく)・擬岩(ぎがん)を配し、つるに似せたロープやハンモックなどの遊具も併せて整備しました。また、屋内放飼場の屋根は人工椰子の葉葺きとして、東南アジアで生息しているオランウータンの故郷を意識した外観としました。

4 施設の概要

- | | |
|----------|---|
| (1) 構造 | 鉄筋コンクリート造一部鉄骨造
平屋建 |
| (2) 延床面積 | 108.58㎡ |
| (3) 施設構成 | ① 屋外放飼場 鉄骨造 半球体形
直径11.4m 高さ10.2m |
| | ② 屋内放飼場 鉄筋コンクリート造
人工椰子の葉葺き |
| | ③ その他 鉄筋コンクリート造
寝室(3部屋)
調理室兼監視室・通路等 |



5 総工費

約1億2,300万円

6 オランウータン

- | | | |
|------|-----|---------|
| ① オス | 14歳 | 名前「フトシ」 |
| ② メス | 12歳 | 名前「ナナ」 |

八木 牧夫 (Makio Yagi)



市の鳥制定10周年記念

これがコアジサシだ！

ゴールデンウィークより動物科学館 2 階特別展示室にて
企画展「これがコアジサシだ！」を開催しています。

夏羽

SUMMER PLUMAGE
(BREEDING SEASON)



千葉市では、平成4年の政令市移行を記念して、翌平成5年に市のシンボルとして「市の木・花・鳥」を一般公募により制定しました。その「市の鳥」がコアジサシであり、今年がその制定10周年の年となります。

コアジサシは、カモメ科の小型の渡り鳥であり初夏から秋まで子育てのために日本にやってきます。この時期、東京湾や外房地域には栄養豊富な小魚が多く集まっており、千葉県はコアジサシの繁殖地として全国的にも重要な地域となっています。コアジサシが飛ぶ海は、豊かな海の証拠といえます。東京湾も高度経済成長期に水質汚濁が極限にまで達しましたが、環境意識の高まりにより、近年序所に改善が進み自然が回復されてきています。三番瀬の保全運動も、コアジサシたち渡り鳥にとっては朗報といえるでしょう。その一方、埋立や護岸工事によりコアジサシの営巣できる土地は消滅の一途をたどっています。コアジサシの未来は私たちの努力にかかっているといえます。



展示風景



幼鳥



雛（孵化後7日）



雛（孵化後1日）



今回の企画展は単に制定10周年の記念事業として
ことを通して、身近な自然環境を見つめなおしてい
通して使用されている細密画は鳥類画家の箕輪義隆
た。氏は鳥類研究者でもあり、東京湾岸でコアシサ
しい絵ですので併せてお楽しみいただければと思いま

だけではなく、コアシサシをさらに知っていただ
ただければとの思いでつくりました。また、全編を
氏にこの企画展のために書き下ろしていただきまし
シの調査も手がけており、細かい観察に基づいた美
す。



成鳥

チドリ目	
レンカク科	6属 8種
タマシギ科	2属 2種
カニチドリ科	1属 1種
ミヤコドリ科	1属 7種
トキハシゲリ科	1属 1種
セイタカシギ科	3属 7種
イシチドリ科	2属 9種
ツバメチドリ科	5属 16種
チドリ科	8属 64種
シギ科	23属 86種
ヒバリチドリ科	2属 4種
サヤハシチドリ科	1属 2種
トウゾクカモメ科	2属 4種
カモメ科	17属 88種
ハサミアジサシ科	1属 3種
ウミスズメ科	13属 23種

ハシブトカモメ属
ゾウゲカモメ属
カモメ属
ヒメクビワカモメ属
ミツユビカモメ属
アカメカモメ属
クビワカモメ属
クロハラアジサシ属
オオハラアジサシ属
ハシブトアジサシ属
オニアジサシ属
アジサシ属
オオアジサシ属
インカアジサシ属
ハイロアジサシ属
クロアジサシ属
シロアジサシ属

カワアジサシ
ナンベアジサシ
アジサシ
キョクアジサシ
ナンキョクアジサシ
ケルゲレンアジサシ
メリケンアジサシ
シロガシラアジサシ
ベニアジサシ
シロビタイアジサシ
アラビアアジサシ
エリグロアジサシ
インドアジサシ
コシジロアジサシ
ナンヨウマミジロアジサシ
マミジロアジサシ
セグロアジサシ
ヒメアジサシ
クロビタイアジサシ
アマゾンアジサシ
ダマラアジサシ
ペルーアジサシ
コアシサシ
アラビアカアシサシ



本企画展はコアシサシたちが南へと飛び立つ9月末まで催されますが、その後市内各所で巡回展を実施する予定となっています。また今後、市内外を問わず学校やサークルなどで環境学習等の目的により貸し出しを希望される団体へのパネルの貸し出しも検討しておりますのでご希望の方はお問い合わせください。

清田 義昭 (Yoshiaki Kiyota)

特集 プロジェクト ZOO コアジサシ

これは、千葉市の鳥『コアジサシ』を人工孵化し、野生復帰させることに取り組んだ男達の物語である。

それは、1本の電話から始まった。

ある日、コアジサシを毎年調査している方から動物公園に電話が入った。「連日の大雨で繁殖地に水がたまり、卵が水につかっている。このままでは、卵がダメになってしまう。動物公園で保護できないか。」という内容であった。

電話を受けたKは、上司に報告した。「このまま放置すれば死んでしまう。ダメでもともと保護し、人工孵化に取り組んでみよう。」すぐに孵卵育雛の担当者(B)に指示が出た。

しかし、卵を勝手に持ってくることはできなかった。コアジサシは、種の保存法により保護されていたのである。卵も例外ではなかった。

Kは、当時野生動物の窓口になっている県自然保護課へ連絡を取り対応について話し合った。ぐずぐずしている時間はなかった。緊急保護で対処することになった。

Kが連絡を取っている間に、Bは人工孵化に関する資料を探したが、簡単には見つからなかった。近縁種を飼育している動物園へも連絡を取ってみたが、人工孵化はやったことがないという答えが返ってきた。自分達で、考えてやるしかなかった。経験豊富な飼育係と相談し、孵卵器の温度、湿度の設定が決まった。

卵の受け入れ態勢は整ったが、それで終わりではない。孵化した場合のエサは何をどう与えるのか等、考えなければならなかった。いくらでもあった。ただ孵化するまでには、少し時間があつたので多少の余裕が持てた。これは調査データのおかげでもあった。

6月6日卵が運ばれてきた。まず、検卵機で卵に光を当て、内部の様子を見た。「生きている。」検卵している者から声があがった。次も、その次も、持ち込まれた17卵のうち11卵が生きていた。生きている卵はすぐに孵卵器に入れられた。果たしてこの温度で孵化

するのか、考えながらもかけるしかない。



6月12日卵のひとつに嘴打ちが見られ、翌13日雛が孵化した。喜びと共に野生の生命力の強さを感じた瞬間でもあった。

孵化したばかりの雛の体重は、約7gであった。エサは、イワシやワカサギを細切りにし、9

時から17時まで2時間おきにピンセットで与えた。ピンセットはKの発案で、先を黒くした黄色いチューブをかぶせた親鳥の嘴に似せた。雛の世話は、4人体制で行った。どの人もコアジサシだけを見ていられるわけではなかった。

男達の心配をよそに、雛は順調に成長し、エサも自分で食べるようになった。エサを自分で食べるようになると、野生復帰に向けた飼育が始まった。

どうしたら、野生のように飛行状態から生きた魚を採食することができるか。

飛行訓練は、手の上でのばたきから始め、大型の仮設放飼場の中



中で投げ上げ、強制的に飛行させた。翼が伸びるにつれて飛行の距離も伸びていった。

採食は、浅いパットの金魚を自力採食させることから始めた。採食が可能になると、パットの位置を台の上へ移動させた。次に、台の横に置いた水槽内に金魚を放し、台から飛び降りないと採食できな

いようにした。徐々に台と水槽の距離を広げ、飛ばなければ水槽には入れないようにした。同時に水位も徐々に深くしていった。

7月中旬には、飛行も採食もある程度可能になったが、野生のもの比べるとかなり差があるように思えた。しかし、その中でも能力の高い個体を放鳥しては、と話していた矢先、事件は起こった。朝、放飼場を見に行くと鳥の数が足りない。近くに翼だけが落ちていた。「ネコにやられた。それも放鳥予定の個体が。」これで、今シーズンの放鳥は断念するしかなかった。男達はとてもショックだった。冬を乗り切るには暖かい箱に収容せざるを得ない。飛行も飛行からの採食もできず、翌シーズンまで生存したのは1羽だけだった。

2002年6月、再び県自然保護課から連絡が入った。光町の保護地区外で産卵された卵を保護してほしい、というものであった。

今度こそは。男達に気合が入った。人工孵化、育雛そして飛行状態からの採食、ここまでは前回の経験がある。あとはいつ放鳥するのか、その見極めだけである。

8月に入り決断した。これ以上遅くなると、野生のコアジサシは南に帰ってしまい、前回の二の舞になる、不安はあるが今しかない。関係者と連絡を取り、日程が決まった。

8月20日、成長した3羽をかごに入れ放鳥場所である木更津小櫃川河口に向かった。天気は良いが風が強かった。果たしてこの風の中飛べるのか。男達の胸の中で不安が大きくなった。

まず1羽をかごから出して川岸に置き、自分で飛び立つのを待つ。みんなが見つめる中、ついに飛んだ。少しひ弱に見えるが風に負けずに飛んでいる。誰とはなしに、感激の声があがった。残りの2羽は、かごを開けてやると飛び立っていった。

男達にしてあげられることはもう何もない。強いてあげれば「野生下で、エサを取り無事生きていってほしい。」と祈ることだけであった。



写真提供：
千葉日報社

伴野 修一 (Syuichi Banno)

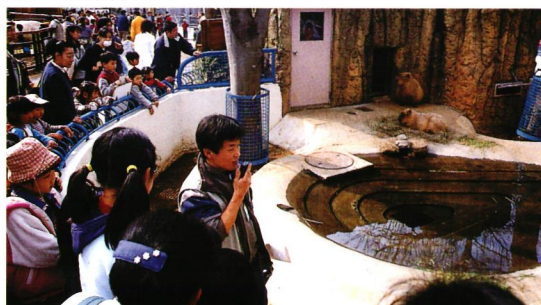


動物公園日誌から

From Zoological Park Diary

’03年2月1日～’03年4月30日

- 2月2日 ベニバシガモ（雄1・雌3）、アカハシハジロ（雄2・雌2）
検疫明け
- 2月3日 ブラッサグェノン（雄1・雌1） 購入にて新着
ゾウ舎、類人猿舎 自動扉保守点検 実施
オオカンガルー（仔） 育児嚢より顔出している
- 2月5日 シロエリハゲワシ 産卵あり
海獣技術者研究会 伊場出席 6日まで（於：下田海中水族館）
- 2月7日 ゴリラ親子 屋内展示場に遊具ロープ設置
- 2月8日 トナカイ（雄） 左角3cm程度発角みられる
- 2月10日 ケープペンギン ペンギン舎室内に移動
- 2月11日 エミュウ（ヒナ） 孵化 体重測定402g
- 2月12日 地域馬防疫技術研修会 辻村、濱田参加（於：船橋競馬場内）
- 2月13日 クロツル（雄1） 検疫明け
- 2月15日 日本初等理科教育研究会 子ども動物園 視察
- 2月17日 アカハシハジロ（雄1） 死亡
ケープペンギン（4羽） ペンギン舎に移動
- 2月18日 アカハナグマ 仔4頭 捕獲後 性別判定および体重測定 実施
- 2月19日 県外中学校 職場訪問4名 受け入れ 実施
ゾウ会議幹事会 浅野出席（於：上野動物園）
- 2月20日 園館長会議 飼育課 小林補佐 出席（於：水戸）
- 2月21日 ホンドザル 流産あり
アカミミコンゴウインコ（2羽） 孵化の確認
- 2月22日 市内源小学校 園内にてミニガイドと発表会 実施
- 2月25日 新潟県福祉保険部より視察2名
カリフォルニアアシカ（仔） 体重測定29.4kg 実施
- 2月28日 ビグミーマーモセット（2頭） 繁殖
キンカジュウ マイクロチップ埋め込み 実施
- 3月1日 ショウジョウトキ（1羽） 起立不能にて死亡
- 3月2日 ビグミーマーモセット（雄1） 肺炎にて死亡
- 3月5日 カイウサギ（11頭） 繁殖
コアシサシについて打ち合わせ 飼育課長、伴野出席
（於：千葉県庁）
- 3月6日 ワオキツネザル（雄1） 繁殖
- 3月7日 ゴリラ 繁殖検討委員会 飼育課長、伊藤出席（於：上野動物園）
- 3月9日 ホウオウジャク（雌1） 肺炎にて死亡
- 3月10日 観客通路 手摺 塗装工事 実施
- 3月11日 ウマ、ロバ全頭 削蹄 実施
- 3月12日 教育研究会理科部会 研修会 実施 宝川対応
パタスザル（1頭） 繁殖
トナカイ（雌1）、アカハナグマ（雄1） 交換にて業者搬出
ワオキツネザル（雄1） 3/6日生 頭部打撲にて死亡
ヨシガモ（雄1、雌1）、アカリュウキュウガモ（雄1、雌1） 検疫明け



ワンポイントウォッチング（カピバラ）

- 3月15日 ヨシガモ（雄1） 衰弱にて死亡
- 3月19日 ヘビクイワシ 産卵（2）あり
- 3月21日 ZOOケイズラリー開催
- 3月22日 マレーバク（雄1） 横浜繁殖センターに貸与にて搬出
- 3月23日 「ワンポイントウォッチング」開催（カピバラ）
- 3月25日 ゴリラワークショップⅡ開催



- 3月27日 アメリカビーバー（雄1） 肝硬変にて死亡
- アメリカオシ（雌1） 食害にて死亡
- 3月28日 アカハナグマ（雄1） いしかわ動物園に寄贈にて搬出
- 3月29日 オオカンガルー（雌1） いしかわ動物園より寄贈にて新着
チンチラ（雄1、雌2） 富士サファリパークより寄贈にて新着
- 3月30日 ゲルディーモンキー（1頭） 繁殖 人工哺育とする
- 4月1日 フンボルトペンギン（ヒナ） よく鳴くのを確認
- 4月3日 シバヤギ（雌1） 繁殖
新オランウータン舎の施設 説明会 実施
- 4月6日 オランウータン（2頭） 新オランウータン舎に引越し



- ホンドザル（1頭） 死産
- ヒロハシサギ 巣材の運び見られる
- 4月9日 ワオキツネザル（雄1） 富士サファリパークに寄贈にて搬出
- クロツル（雄） 断翼 実施
- 4月10日 シバヤギ（2頭） 繁殖
- オオカンガルー（仔） 育児嚢より顔を頻繁に出す
- 4月13日 カナダカワウソ 採食少なく、抗生剤注射
- 4月14日 チンチラ（雄1、雌2） 検疫明けにて子ども動物園へ
- 4月15日 コサンケイ（3羽） 人工孵化
アルダブラゾウガメ 左後肢より出血あり 治療
- 4月17日 カナダカワウソ（雄1） 多臓器不全にて死亡
- 4月20日 「ワンポイントウォッチング」開催（フサオマキザル）
- 4月21日 オオカンガルー（雌1） 検疫明け
ポットベリー 麻酔下にて犬歯切削
- 4月22日 ワオキツネザル（雄1） いしかわ動物園へ寄贈にて搬出
明徳短期大学 園内見学「動物の子育て」について
- 4月23日 千葉大 看護学校指導者 研修会 実施 高橋対応
新オランウータン舎 内覧会 実施
- 4月24日 ゲルディーモンキー（仔） 衰弱にて死亡
- 4月26日 新オランウータン舎一般公開
- 4月29日 ポットベリー（雄1） 腹膜炎にて死亡
- 4月30日 フンボルトペンギン（雄1） 肺炎により死亡
ヘビクイワシ 破卵（1）あり

牧野 辰男（Tatsuo Makino）



エミュウのヒナ



Information

平成15年6月・7月・8月の 催し物一覧

- ★ 6月14日(土) 連続講座「人のしあわせ・動物のしあわせ」
- ★ 6月21日(土) コアジサシシンポジウム
- ★ 6月22日(日) ワンポイントウォッチング(アメリカバイソン)
- ★ 7月23日(水)・24日(木)・25日(金) サマースクール
- ★ 7月1日(火)～31日(木) 動物愛護標語募集
- ★ 8月29日(金) ZOOキッズデー

上記以外の土曜・日曜・休日、夏休みは動物公園映画会を上映